

Eureka IX

六年制通信 No.7 令和3年5月28日(金)号

啐啄の機 (そったくのき)

「啐啄の機」について書いたのはもう6年ほど前になるでしょうか。大切なことですからもう一度書いてみましょう。これは「啐啄同時」とも言い、もともと禅の世界から生まれたのですが、教育の一つの理想と考えられている言葉です。啐とは、雛鳥が生まれようとして中から殻をつつくこと、啄とはその機を捉えて親鳥が外からつつくこと。双方の機があって初めて雛鳥は殻を破り、この世に誕生するのです。したがって「機を得て両者が応じる得がたい好機」の意味で広く使われるようになりました。

「啐啄同時」すなわち「啐啄は同時であるべし」とは、つまり両者の呼吸が早すぎても遅すぎてもダメということです。これもまた非常に含蓄のある表現だと思います。師弟関係を考えると、啐するのは弟子つまり生徒諸君で、啄するのは師つまり教師です。生徒諸君が殻を破ろうとするとはどのようなことを言うのか。そのときに教師が啄するとは実際にはどのような光景を言うのだろうか。君はどう考えますか。その機を得た者にははっきりとわかるそうですよ。長い人生において啐啄の機をどう考えるか。私は中高生のうちに何度かその機が訪れると信じています。大学に入り、本物の学問に触れるようになるとまた別の機会があるでしょうが、君たちの人生で最初に迎える啐啄の機は今です。特に高校に入る頃が大切なのではないかと、そう感じています。中学までの義務教育を終え高等学校へ進学するということは、自主自立自学自習の精神を自ら求めたということです。高校では中学校で習った具体的な事例を、抽象概念へと入れ直します。時間もかかるし集中力も知力も、求められるレベルが今までとは違います。取り扱うものの質が変化するとき、君たちの能力にも大きな飛躍が求められます。数学で考えるとよくわかると思うのですが、中学校で未知数 x, y の方程式を習い、ルート計算に触れたと思ったら、高校では虚数 (Imaginary Number) の領域まで進みます。君たちの学習のレベルは極端に上がります。

君たちは今はまだ雛鳥なのでしょうが、殻の中ではずいぶん大きくなってきているはずです。学校の間では私たち教師が親鳥なのでしょうが、こちらには啄する準備はできています。あなたたちの、内側から殻をつつく音を聞きたいと毎日待っている状態です。しかし現実には、音の聞こえる雛鳥はごく少数です。殻の中で子供のまま過ごしている生徒がまだまだ多いと思います。あるいは、つついているつもりでも、その音があまりにも小さくて聞こえないのかもしれませんが。しかし一年二年と経ってしまつて、慌てて大きな音でつついても、もう遅いのです。

激しい質の変化、レベルの変化にとまどいながらも、そこで諦めずにわかりたいと

強く思う時、君はようやく啐の準備ができていると言ってよいでしょう。ずいぶん前ですが、英単語が覚えられない、数学ができないと悔し泣きをしている生徒がいました。学習の内容自体はそんなに難しいことではなかったのですが、私には彼の殻をつつく音が聞こえます。一所懸命につつこうとしているから悩むのです。その姿を見て、「まだまだそんなところで泣いていてどうする」と言って帰しましたが、同時に、それでいいのだとも思っていました。少なくともその子に取り組んでいます。できるようになりたいと望んでいます。努力を止めさえしなければ必ずできるようになります。実際、彼も自分で勉強していくようになりました。卒業する時には、泣いていた自分を懐かしむ余裕もありました。求める気持ちが啐であるといってよいでしょう。自分の気持ちを強く高く持って、それを行動に表してほしいと思います。そして、私たち教師は君たちの啐の音を聞き逃してならないと思います。私たちもまた、耳を澄まして音を拾っていく努力をしなくてはならない、それが啄する教師の務めなのですから。

今週のおすすめ

- ・映画『舟を編む』とその原作 三浦しをん『舟を編む』(光文社文庫)

私は映画は原作を越えないと考えていました。誰の言葉でしたか、読書の与えてくれる想像力の翼には映像は到底勝てない、と。ところが今回は映画がよかった。役者さんて、すごいですね。キャストの名優ぶりに感動しました。

馬締光也、まじめみつや君が主人公。性格：まじめ。大学院で言語学を専攻した変わり種。他人とのコミュニケーションが苦手。このまじめ君が辞書作りにかかわっていく物語。馬締君が才能を見出される瞬間は本でも映画でもいいですね。老学者の熱意、自分を辞書編纂へ導いてくれた定年間近の編集者の献身、辞書に一生を捧げようと決意する馬締君、チャライ先輩と築き上げていく友情。とても素敵です。辞書『大渡海』が出来上がった翌日から改訂版に取り掛かろうとするまじめ君。彼らの懸命さに胸を打たれました。私、続けて3回観ました。同じところで涙ぐみました。

途中、下宿の大家さんのお孫さんに恋をするのですが、これがまたまじめ君の超まじめな恋なんだなあ。ここは特に本より映画の方が何倍もよかった。さらに辞書の編集部雰囲気、資料室の用例採集カードの棚など、忠実に再現されていると思いました。三浦さんは広辞苑の編集部取材したようです。

さて、質問。方向の「右」を定義してください。私の愛する新明解は第5版で「アナログ時計の文字盤に向かった時に、一時から五時までの表示の有る側」、三省堂国語辞典は「この本を開いたとき、偶数ページのあるほう」としています。映画で馬締君は「西を向いた時の北の方角」、老先生は「数字の10を書いたときの0の方が右」と定義しています。さて、君たちだけのオリジナルの定義を考えてごらん。

ちなみに「恋」の語釈を任された馬締君は自分の体験から「ある人を好きになってしまい、寝ても覚めてもその人が頭から離れず、他のことが手につかなくなり、身悶えするような心の状態。成就すれば、天にものぼる気持ちになる」と書きました。

BGMは Bette Midler の *The Rose* でした…。